

物言わぬ者たちの受益なき負担 —環境倫理と世代間倫理の視点より—



大西博文
公益社団法人土木学会
専務理事

現在筆者は、土木学会の創立 100 周年記念事業として実施されている「社会と土木の 100 年ビジョン」の策定グループにその一員として参加しているが、社会の未来像を考えるときに、まず現在の社会的問題を抽出し整理することになる。いくつもある問題の中に、気候変動問題、生物多様性問題が出てくる。また、国や地方の財政では、財政赤字の常態化、膨大な政府債務残高といった問題を挙げざるを得ない。これらの問題がなぜここまで深刻になったのか、ここではそれを述べてみたい。その中で環境倫理や世代間倫理が私たち現在世代に突きつけられることになる。

自然の生存権、世代間倫理を主張する環境倫理

気候変動問題と生物多様性の減少問題、これらは同根の環境問題である。地球上では人類が発展、繁栄し、それに伴って人口増加と生活水準の上昇という人口圧力が自然環境に増大する巨大な負荷をかけている。人間の生活、経済活動に必要なエネルギーを得るため産業革命以降化石燃料の燃焼による温室効果ガスの排出が増えつづけ気候変動を惹起し、近年世界各地で異常気象、極端気象が頻発している。また人口増加に伴う大規模な土地改変が生物の生息・生育域を消滅させ生物種の減少をもたらしている。これらの人口圧力による環境負荷が自然環境の自浄・復元能力を超えて、地球がもつ気象システムやエコシステムが変調を来している。

なぜここまで問題が悪化するまで私たち人類は環境負荷を増大させてきたのか。それは環境負荷に伴う受益と負担が切り離されていて、しかも負担者・被影響者が自然という物言わぬ者であるからである。自然の生存権が人間中心主義のアンチテーゼとして提唱される所以である。環境倫理はこの自然の生存権を主張している。また、環境倫理は気候変動問題を環境負荷と環境影響の間に時間差がある世代間倫理の問題として捉えている。

財政赤字はもう一つの世代間倫理の問題

次に、日本の国や地方の財政状況を見ると、1993 年度からずっと財政赤字が常態化しており、政府債務残高は 1,000 兆円超と膨大な額を記録し、その対 GDP 比は 200% を超えて先進国中最悪である。財政赤字は、歳入より歳出が上回っている、すなわち自分の経済力を超える生活を国民はしていることを意味している。国、地方公共団体は、国民、住民の福祉の向上のために各種政策を講じるが、福祉の向上こそが国、地方の発展の成果に他ならない。その役割を中央政府、地方政府は担っており、この実現は当然のことながら経済による富の創造に基づいている。経済力は時により上下に変動するが、日本は今後長期的には横這いや低下傾向を示すのではな

いか。その一方で、福祉は向上こそは望まれるが低下は望まれない、下方硬直性がある。この経済力と福祉水準のミスマッチが問題なのである。筆者は以前これを「発展論理の衰退不可避性」と呼んだが、私たち人間はこれを克服できるのか。身の丈に合った生活ができるのか。さもないと現在世代のつけは債務となり未来世代が返済を強いられる負担となる。世代間で受益と負担の食い違いが生じ、不公正が生まれる。これは世代間倫理の問題である。（この受益と負担の視点からは、現在世代の消費のための赤字国債は許容されないが、未来世代も受益する社会インフラ投資のような建設国債は許容されることになる。）

加藤尚武氏は、このような世代間倫理の問題は統治形態、政治制度が中世の封建制度から近代の民主主義に変わったために起きた、すなわち、封建制度では社会的重要事項は通時性を基本として決定されていたが、民主主義では共時性を権利として決定されるようになったからとしている。封建制度では体制維持、家の存続を重視して未来にも配慮されたが（その反面下層の民や二男、三男は大変な苦勞を強いられた）、民主主義では現在の国民各層の福祉の向上といった現在重視型の意味決定方式が採用され、未来への配慮が疎かとなりがちになる。民主主義の陥穽である。

物言わぬ者たちの権利を護る

上記のいずれの問題も、それぞれ自然、未来世代といった現在の決定に物言わぬ者たちが、現在世代の決定のため受益なき負担を強いられる存在となっている。彼らに対する公正な扱い、権利を護るために環境倫理、世代間倫理が提唱され、私たち現在世代に自制を促すとともに、自らを縛る法制化をも求めている。

それらへの取組みはすでに出てきており、1992 年にブラジルのリオデジャネイロで開催された国際連合の地球サミットはその嚆矢である。ここでは、気候変動枠組み条約と生物多様性条約が採択され、その後大多数の加盟各国がこれらを批准している。財政については赤字や債務残高を制限する法律が不十分ながら各国で制定されている。これらは福祉や教育など現在の行政サービスの低下を意味し、現在世代に痛みが走るものである。現在世代が物言わぬ自然や未来世代に想いを馳せ、自らを制御できるか。今これが私たちに求められている。このように地球の有限性に近づいている現在の人類がつくる色々な将来ビジョンは、環境倫理が主張する世代間倫理的なもの、最近の言葉では持続可能な社会、あるいはその方法論をも示した循環型社会などを指すものでなければならない。

ここでは問題を倫理問題として捉えて論じたが、もちろん私たち人類はこれまで様々な問題を技術的に克服してきたようにこれを技術問題として解決するアプローチもある。地球の容量が意識されることになるところの。環境倫理と技術的の双方のアプローチが模索されることになるのだろう。

参考文献

- 佐々木葉：「この本を薦めます 第 12 回」、土木学会誌、2013 年 12 月
加藤尚武：「環境倫理学のすすめ」、丸善ライブラリー、1991 年